Junior All-JapanBowlingGames 2021

男子は本格的なダブルハンド時代の到来

2020年度全日本小学生ボウリング競技大会

2部門で大会新記録などハイレベルな争い

▲優勝者、左から小4男子･高橋、小5男子･齋藤、小6男子･山口、小4女子･林、小5女子･増田、小6女子･豊田の各選手

〔6年生の部〕

男子は、予選（6G）前半で770を打った山口直矢選手（京都・亀岡市立千代川小）が1416で1位通過、9ピン差で山中麗選手（茨城・坂東市立七重小）が2位につけていた。決勝は山中選手が586と伸び悩んだのに対し、698と伸ばした山口選手が、トータル2114の大会新記録で快勝した。

女子は、押切絢音選手（春日井市松山小）と豊田こころ選手（一宮市立向山小）の愛知勢2人が、予選を1197の同ピン1位で決勝に進んだ。その決勝では502にとどまった押切選手に対し、豊田選手が617とまとめて、トータル1814で優勝した。

◀小6男子優勝の山口選手「優勝するために集中して練習をしてきた」

◀小6女子優勝の豊田選手「決勝は押切さんを1ピンでも上回ろうと集中した」

〔5年生の部〕

男子は、すべて200アップの1327を打った土肥大輔選手（岡山市立鹿田小）が、2位の齋藤大哉選手（埼玉・川口市立戸塚東小）に48ピン差をつけていたが、決勝は665を打った齋藤選手が611の土肥選手を6ピン逆転するトータル1944で優勝した。

女子は、予選を1159で1位の井上夢望選手（愛知・瀬戸市立水野小）が、決勝でもそのまま逃げ切るかと思われたが、最終Gで149と苦しみ、244を打った予選6位の増田絢香選手（愛知･豊橋市立鷹丘小）が、トータル1697で逆転優勝。井上選手は34ピン差の2位だった。

〔4年生の部〕

男子は、予選を終わって接戦となっていたが、他の上位選手が決勝でスコアを伸ばせないなか、予選を1125で1位の高橋望選手（茨城・ひたちなか市立中根小）が554を打って、トータル1679で優勝、2位に1564で中田元輝選手（東京・八王子市立城山小）が入った。

◀小5男子優勝の齊藤選手「決勝で絶対に逆転しようと思った」

女子は、予選で1237を打って、2位の植田円香選手（神奈川・町田市立藤の台小）に203ピンの大差をつけて独走態勢の林恋幸選手（愛知・一宮市立三条小）が、決勝はややペースダウンしたものの、トータル1705の大会新記録で優勝した。2位には1546で植田選手が入った。

◀小5女子優勝の増田選手「決勝ではよくピンが倒れてくれた」

◀小4男子優勝の高橋選手「女子よりスコアが低いのが悔しい」

◀小4女子優勝の林選手「全小3連覇を目指したいのでうれしい」

FOCUS UP

コロナ禍再拡大！　JPBA杉本専務理事に「大会前PCR検査」の実状を聞く

新型コロナウイルスの感染再拡大に伴う2度目の緊急事態宣言下で全国大会の開催に踏み切ったＪＢＣとは対照的に、ＪＰＢＡ（公益社団法人日本プロボウリング協会）では、春先に予定されていた公式戦は、スポンサーとの話し合いの上ですべて延期した（7面記事参照）。昨年同様の状況下で幕を開けた2021年。本紙は昨年ＪＰＢＡが導入したＰＣＲ検査の実状を、専務理事兼事務局長の杉本弘孝氏に聞いた。

☆

昨年は2月の女子プロオールスターゲームのあと、8月の女子新人戦まで公式戦を中断しましたが、その間にＰＣＲ検査の導入を決めて、検査機器も購入しました。

初めて検査を実施したのは、9月のドリスタメンズカップでした。プロ限定の大会で参加人数も少ない上に無観客開催だったので、（会場の）ドリームスタジアム太田のスタッフとわれわれ協会の人間も協力して、大会前日に出場予定の全選手とテレビクルーを含む大会関係者を対象に行いました。

ＪＰＢＡ杉本専務理事

すぎもと・ひろたか／1954年9月13日生まれ、新潟県出身。73年に西武鉄道入社、BIGBOX高田馬場にて長年ボウリング事業に携わる。2012年に退職してJPBA事務局入り。18年より現職（専務理事兼事務局長）。

検査は1回1グループ8人で、3グループ同時にできるのですが、最終的な結果が出るまでに1時間半から2時間かかります。最初は慣れないせいもあって、すごく時間がかかりましたね。

実は、遠藤誠（47期）の結果が最初「不明」と出て再検査したのですが、結局「陰性」で事なきを得ました。

検査機器は、神奈川県の共同研究グループが開発して、ダナフォームという会社が販売しているものを購入しました。理事会に諮る時間がなく、谷口（健）会長の許可を得て購入し、トーナメント委員会に報告したのが7月のことです。

横浜で機器の使い方を指導する講習会があって、自分と山元（次長）と堀口（トーナメントディレクター）の3人で受講しました。耳慣れないカタカナの検査試薬がいくつもあって、難しかったですね（苦笑）。

検査には医師の立ち合いが必要で、ダナフォームさんからもスタッフが毎回3人派遣されてきます。その分の経費も併せて、参加者の多い大会になると百万単位で費用がかかる。まさに“検査貧乏”で、一つひとつの大会の収支は真っ赤ですが、公益法人としては関係者の安心・安全が最優先。やってよかったと思います。

最初のうちは大会ごとに実施していましたが、次の大会までの間隔が2週間以内のときは1回スキップして、それ以上空くときだけ実施することにしました。オープン大会では、アマチュアの選手に前日入りしてもらうわけにはいかないので、事前に検査キットを送って、それを検査機関に回すという別の方法も併せて実施しました。

幸いにして、昨年は大会期間中に1人の陽性者も出さずに終わることができて、会長も喜んでいます。

今年も大会前にＰＣＲ検査を実施して、コロナ禍の状況を見ながらギャラリーを入れていくことになると思います。プロテストも、状況によって若干日程がズレる可能性はありますが、昨年中止しているので、今年は何としてもやりたいというのが協会の意向です。

今回の緊急事態宣言が予定通り1カ月で解除されればいいのですが、今はそれすらも分からない状況ですからね（注：2月2日に1カ月の延長が決定）。これがまた長引いて、東京オリンピックが中止になったりすると、いろいろ考え直さなければいけないことも出てくる。

今は春以降に予定している大会が無事開催できることを祈るばかりです。

▲大会前日に初のPCR検査が実施されたドリスタメンズカップの会場風景